受難の時代

岩見沢市医師会　副会長
岩見沢市立総合病院　院長
中　島　保　明

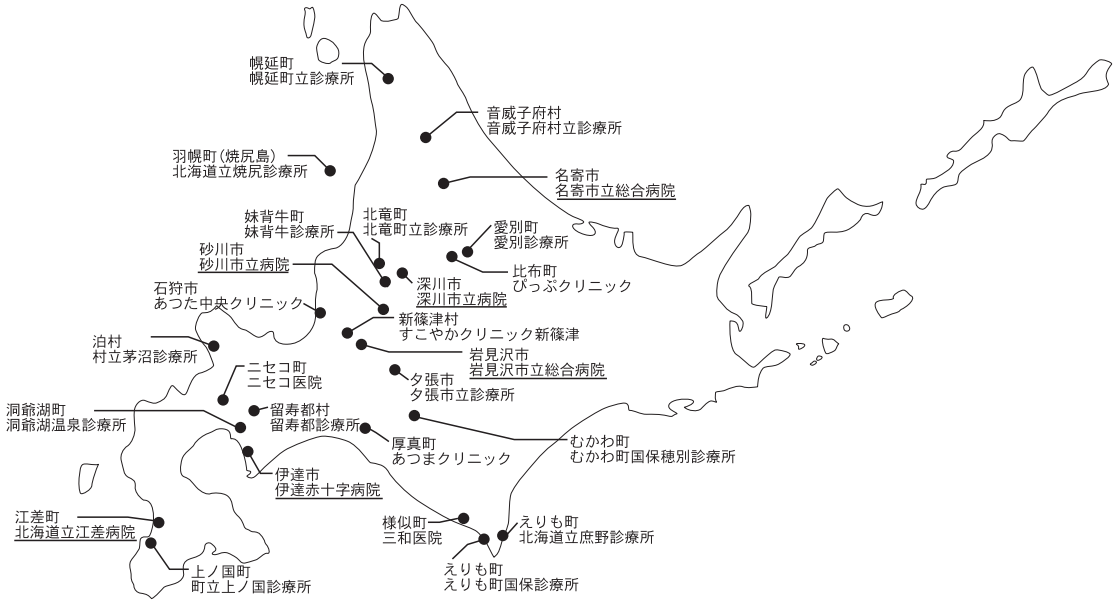
わが病院、ご多分に洩れず医者が足りない。そこにさらに追い打ちをかけるように、大学のある医局派遣の医者を来年３月ですべて引き上げるとの通達があった。バッタである。今その医局とは粘り強く交渉を続けているが、楽観できる状況ではない。早速、道内の他大学にも足を運んだが、いずこも医師が不足していて、新規の病院に派遣できるはずもないとにべもない返答しかもらえなかった。

昨年、同じくある自治体病院の院長がやはりある科の撤退を余儀なくされ、医者探しに胃が“きりきり”痛むと話していたのを思い出した。わたしの胃もそろそろ“きりきり”しようと準備しているようだ。さらに数年前、広島で学会があり参加した。帰りに空港で、ある道内自治体病院の院長と会った。わたしもその先生も外科なので、軽い気持ちで「先生も学会でいらしたんですね」と話しかけた。その先生が答えて日く､「学会どころじゃない。医者探しに来たんだ」わたしは絶句した。しかしわたしも今、関東方面に医者を探しに行こうと細い人脈を頼りにどこかの大学医局にチャンネルをつなごうと必死である。

医者はどこへ行ったのか。道内の医学部卒業生の６割以上が本州方面（とくに関東？）での研修を希望し、北海道を去ると聞く。そして、道内はというと札幌の一人勝ちである。しかも大半は市中病院での研修を希望するから大学に行っても医者はおらず、かつての医者のプール機能を期待することは不可能である。道がその機能を果たせるかというと、それをするための権限も金もない。

ではどうすればいいのか？　わたしに名案はない。卒業生を法律で縛りつけて地域に置いておくというわけにもいくまい。自分の選んだ気に入った病院で存分に研修するという自由を得た若い医者たちが大学での研修を見直すとも思えない。まして卒業後は必ず大学医局に所属するという規則を作るなどということも不可能である。何せ「パンドラの箱」は開いてしまったのであるから。わたしにできることは自分の病院を何とか少しでも充実させて魅力ある病院にし、一人でも多くの医者に来てもらえるよう環境整備をするくらいのことしかないように思う。医者が溢れかえる日まで…。受難の時代である。

羆熊通信執筆者所属医療機関所在地



※　今号と次号の羆熊通信特集は、北海道が策定した「北海道へき地保健医療計画」に基づく「へき地医療拠点病院」19施設ならびに「へき地診療所」83施設に対して執筆を依頼しました。
今号では、上記の地図に所在市町村・施設名を表示した「へき地医療拠点病院」６施設（下線付）、「へき地診療所」20施設を掲載しています。